

子どもの楽器を用いた活動に関する一考察

A Study of Playing Instrument for Young Children

中村千晶*

Abstract

Young children have an interest in sound and they like to play the instruments. In the kindergarten, there are some musical activities of playing the instrument, but the situation is not so good.

It is important that children are learning to manipulate materials and instruments, because of development of interest in sound experimentation. So it is necessary that children use freely experiment with instruments and they will have musical growth.

The purpose of this report is that finding to value of using instruments, curriculum of music, the selection of instruments, and musical environment.

キーワード：子どもと楽器、いじり遊び、音楽活動

はじめに

人間と楽器とのつながりは長く、人類の発生と共にあると言っても過言ではない。古代より、人がいるところには楽器があり、楽器を用いて音を出し、コミュニケーションを取ったり、生活するために用いたり、人々の生活に深く根差しているものであった。また、人は楽器から出る音に興味を持ち、演奏することや楽器から奏でられた音を聴くことを楽しんだり、歌の伴奏に使ったりなどして音楽にも用いてきた。このように生活や音楽に用いられてきた楽器は、その昔、動物の骨であったり、木、皮、その他身近な素材から作られていた。その後、文明の進化と共に楽器の材質も変化に富み、今日に至っている。そして、人と楽器の関わりは、その人が置かれている状態や環境によって異なり、楽器から遠ざかっている人もあれば、楽器と密接な関係を保っている人もいる。

では、子どもと楽器との関わりについてはどうか。生活の中で自然に楽器に触れたり、音楽をするときに用いたり、教育の場で楽器を見たり触れるなどの経験がたくさんあり、幼い時から何かしら楽器と関わっているが、保育や音楽教育の中でど

のような指導がなされ、子どもと楽器の関わりはどのようなになっているであろうか。子どもが出会う楽器の種類、楽器を用いた音楽活動、弾く活動の内容や方法などから、どのようにすることが子どものために望ましいのかを研究目的とし、子どもと楽器についての方向性を見い出していきたい。

第1章 本学の音楽教育に関連深い書籍

第1節 「幼稚園及び低学年の行為課程」

“A Conduct Curriculum for the Kindergarten and First Grade”

Patty Smith Hill と Teachers of Kindergarten and First Grade of Horace Mann School によって書かれ、1923年（大正12年）に米国で出版された書籍である。この書籍についての詳細はこれまでの聖和大学論集に述べたが、「コロンビア大学附属幼稚園及び低学年の課程」として大阪市保育研究会が訳し編纂したものと高森富士が訳し、ランバス女学院が編纂したものの2つがある。高森は本学の前身校であるランバス女学院から聖和女子短期大学まで長きに渡り教授を務めた人物で、コロンビア大学ではヒルに教えを受けており、実際の保育に即した訳を行ったと言える。本論文では、本学の教授であった

* Chiaki NAKAMURA 教育学部准教授

高森富士の訳を見る。

ここでは音楽活動を1. 音楽に対するリズム的反應—身振りによって—、2. 音楽に対するリズム的反應—楽器の使用によって—、3. 唱歌、4. 音楽鑑賞の4つとした。したがって、楽器のことは音楽に対するリズム的反應のひとつとして示され、以下の通りである。

1. 「音楽に対するリズム的反應—楽器の使用によって—」の概要

“Rhythmic Response to Music—Through Use of Musical Instrument—”

(1) 材料

・リズムのため

太鼓、シンバル、ガラガラ、砂紙張り積木 (sand-paper blocks)、ベル、トライアングル、タンブリン

・旋律のため

卓上ピアノ (toys pianos、大・小)、木琴、チューバホーン、水コップ (water-glasses)

(2) 代表的活動

・音楽に合わせてリズム的に反応する

a) 楽隊用楽器 (band instruments) を用いる

1人—独奏

小グループ—3重奏、4重奏

大グループ—楽隊 (band)

b) 楽隊を指揮する

・楽器の種類によってグループに組分けする

ベルとトライアングル

シンバルと太鼓

タンブリン

ガラガラと砂紙張り積木

・音楽の異なった型に反応する

・次の相異を強調する

タイム

強弱

音楽形式

・卓上ピアノ、木琴、チューバホーン、水コップを用いる

(3) 思考、感情および行為の向上

・楽器を使用する愉快

・楽隊を奏する愉快

・ある程度の規定を設け、それに従うことを習う

a) 楽隊の編成

楽器の取り出しと後片付けを静かにする

楽器の適当な持ち方

奏楽を始めるにも終わるにも指揮の合図を待つ

演奏中、指揮者に注意する

楽隊の形式に席を占める (半円形)

同種類の楽器を持つ者は一緒に座る

b) 自分の好きな楽器でも人と仲間に使う

指揮を交代に勤める

他人が演奏する時に傾聴する

・楽器で実験をする

・楽器を大切に取り扱い扱う

・楽器で旋律を奏することを学ぶ

木琴、水コップ、卓上ピアノ

2. 特徴

このように子どもの思考、感情、及び行為の向上を促す課程の代表的活動の一つに音楽があり、子ども自身が体験や経験を通して学ぶことができるように考えられ、楽器の使用によって音楽に対するリズム的反應を養うと位置づけられた。

使用する楽器については、リズムと旋律のために適切な楽器が上げられた。リズムのためには砂紙張り積木とあったが、現在ではあまり使われていない。また、現在においても使用されているカスタネットは、ここでは示されなかった。旋律のためには卓上ピアノとあり、原著では toy pianos と記されたものである。また、チューバホーンと水コップがあげられたことも特徴であり、これらは現在あまり使われていない。

次に代表的活動では「楽隊」という言葉が使われているが、原著では band と記されていた。そして楽器を独奏、重奏、また楽隊として大きなグループで演奏するだけでなく、指揮をすることが含まれていることは興味深い点である。

思考、感情および行為の向上にも楽隊、指揮が含まれており、楽器の使用や楽隊を奏することから愉快 (pleasure) に結びついている。楽隊における細かいこと、好きな楽器でも仲間と一緒に使う、楽器を大切に使うなど、教育的な配慮も示されている。

第2節 「幼児の音楽」

“Music For Young Children”

この書籍についても同じく詳細については本論文

で省くが、ヒルは序の中で音楽の専門家であり、コロンビア大学のティーチャーズ・カレッジで教育を受けた著者 Alice Green Thorn を紹介し、絶大に信頼していた。彼女は幼稚園および小学校の現場で、子どもに適した音楽教育を実践した教師である。前述の高森富士、伴きみ子によって訳されたもので、本学に於いて重要な役割を果たしてきた書籍である。

音楽を唱歌、律動運動、楽器の使用、音楽会と音楽上の見学の4つとしており、ここでは楽器の使用を取り上げる。以下にその概要を示す。

1. 「楽器の使用」(The Use of Musical Instruments) の概要

(1) 音の実験に対する興味の発達

- ・子どもへの音楽への最初の興味は音を実験すること
- ・声や手足などに始まり筋肉の統制力が増すと、音をたてる材料に移って音遊びを楽しむ
- ・自分達で楽器を作ることに興味を持っている

(2) 楽器使用の価値

- ・“いじり遊び”(manipulation) と子ども音の実験から生まれる
- ・すべての楽器に対する興味の発達と、楽器を使用し、かつ楽器を製作したいという望みの発端
- ・音楽的表現の申し分なき1つの形であるという自覚
- ・子どもは単純な楽器の使用によって、鑑識においても又技術においても、自分に相当したレベルの経験にあづかることができるという満足を得る
- ・進歩的な音楽発達の機会を提供する
- ・団体演奏は貴重な社交的習慣を発達させる機会となる

(3) 楽器の選択

a) 合奏

太鼓、タンブリン、トライアングル、様々な種類の鈴、色々な種類のガラガラ、シンバル

b) 独奏

鉄琴、木琴、音楽コップ、スイスの鈴、ピアノ、アコーディオン、初歩用のフルート(各自に)

c) 子どもが操作できる機械楽器

蓄音機、オルゴール

d) 音響の経験の材料

木材(木片、棒)、箱(ブリキ、木、厚紙の大・小)、へこんだ容器、ゴム紐、真鑄の管(色々な長さに切ったもの)、釘(大きいもの)、蹄鉄、荷札(丈夫な紙)

- ・扱いやすいこと
- ・気持ちのよい正確な音(美しい音)を出すこと

- ・耐久性があるもの

(4) 楽器の使用について

- ・最初は楽しく自由に手にできるようにしておく(低い棚に置く)、子どもが自由に楽器を使う機会を得るようにする
- ・教師は背後にいて子どもの反応を観察し、必要ときに助力を与える

(5) 合奏(ensemble playing)

①楽器

- ・太鼓、シンバル、トライアングル、ベル、ガラガラ、タンブリンなど
- ・先の楽器使用を十分経験すると、子ども自身が一緒に弾きたいというようになってくる
- ・最初は人数を少なくする
- ・楽器の数と種類は教師と子どもで一緒に決める

②形態

- ・1つのクラスを各グループに分けて行い、演奏者と聴き手の両方を経験する
- ・子どもから楽隊の指揮者が必要となれば、話し合って1人選ぶ

③団体における楽器の位置

- ・初期
合奏経験を楽しむこと
社会的順応を学ぶこと
楽器の扱い方を学ぶこと
- ・経験を経た後、同じ楽器を持った者同志が集まる

④合奏のための音楽

- ・優れたもの
- ・形式が単純なもの
- ・変化に富み、次第に難しくなっていくもの

4分の4拍子、4分の3拍子、8分の6拍子、特定楽器用音楽、弱拍部鑑賞、音符の長さの対照、音の性質及び厚みの対比

(6) 独奏 (solo)

①楽器

合奏で使う楽器以外にも鉄琴、木琴、音楽コップ（コップに入れた水の量により音程が変化する）スイスの鈴、ピアノ、オルガン、銀笛などが適切

- ・幼い子どもはまだメロディーを正確に弾くことはできないが、自分の知っている歌を弾くことを非常に喜ぶ。記憶をたどりながら、弾いては違いを見つける
- ・新たに自分のメロディーを創作する機会にもつながるので、易しい歌をたくさん歌えるようにしておく準備は必要である
- ・耳で聴き、覚えて弾くことから始まるのが幼い子どもである

(7) 楽器製作

音響経験のために用いる材料を置き、取り出し易くしておく

①材料

- ・既製のものばかりでなく、空き箱、缶、ゴム、管、木材、紙やすり、紙、ひもなどの身近な材料

②留意点

- ・丈夫に作る
- ・音色、装飾はできるだけ美しくする

③価値

- ・音響に対して興味ある実験をする機会を得る
- ・作る過程を経て精神的に刺激となる
- ・自分の作った楽器を使う喜びを覚える
- ・自身で楽器を作る機会を得たことから他の楽器も鑑賞し得るようになる

2. 特徴

音楽への最初の興味は、音を実験 (experimentation) することとある。音を実験するとなると難しい感があるが、子どもは様々な音を試み、自然に音への探索活動を行っている。そこから楽器を使用することにつながっていくわけであるが、音を実験する試みである manipulation、すなわちいじり遊びの重要性が述べられていることが本書の大きな特徴である。いじり遊び、音遊びを十分楽しむことから音や

楽器に興味を持ち、親しみが増し、楽器を使用していくことにつながっていくと考えられた。楽器使用への導入、前段階を大切に考えた点は、幼い子どもの指導に特に必要なことである。

楽器については、合奏のときがリズム楽器の使用、独奏のときは旋律を出すことのできる音程のある楽器が用いられた。カスタネットはここでも記されておらず、コップに水を入れて音を出す水コップが記されたことは、前述の「幼稚園の及び低学年の行為課程」と同じであった。

演奏形態は合奏と独奏で、ここでは合奏に楽隊 (band) という言葉は見られなかったが、合奏の中に『楽隊の指揮者が必要となれば〜』と、そこに楽隊と言う言葉が記されていた。また、幼い子どもがメロディを弾くとはどういうことかについて、具体的に少し説明がなされた。

そして、楽器を使用し演奏することで終わらずに、音響の経験として身近な材料で作る楽器製作に発展するように計画され、その価値は大きいとした。子どもが、あるいは子どもと教師が一緒になって楽器製作をすることの大切さ、その価値を認めていることも大きな点である。

このように子どもの興味の発達を大切にしている点が特徴で、興味から子どもの要求を満たすような楽器を使用した音楽活動につながっている。また、楽器を低い棚に置く、自由に楽器を使える機会を与えるなど、実際に必要なことを具体的に明記していることも特徴であると言える。

第2章 現行の要領の中で

第1節 幼稚園教育要領

1. 概要

平成20年告示、平成21年4月に施行された現行の幼稚園教育要領を概観する。音楽的なことは感性と表現に関する領域「表現」で、感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現することを養い、創造性を豊かにするとある。そして、ねらい、内容の取扱いに沿って記されている。

2. ねらい

3つのねらいの中で、楽器の使用は(2)感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむに関連している。美しさなどに対する豊かな感性を育むと同時に、楽器を用いて表現し、楽しむ経験、音楽

活動のひとつとして位置づけられている。その子どもなりに表現し、その楽しさ味わうことができるようにする必要がある。

3. 内容

8つあるが、楽器を用いた活動は特に内容(6)、音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わうに関わっている。しかし、簡単なリズム楽器を使ったりと記されているだけで、その詳しい事柄および具体的な楽器名は記されていない。

4. 内容の取扱い

先の内容を取扱う上で留意する点が3つ記されているが、(3)に示されている表現を楽しむ表現する意欲を十分に発揮させることができるように、遊具や用具を整えたり、他の幼児の表現に触れられるように配慮したり、表現する過程を大切に自己表現を楽しめるように工夫すること、に関連している。用具には楽器も含まれると思われるが、音楽的環境として整え、子どもが楽しめるように工夫することが必要である。

このように、楽器を用いた活動は領域表現の中で、表現する過程を大切に自己表現を楽しむことができるようにすることであるが、詳細が具体的に記されていないので、音楽カリキュラムの中で保育者の工夫によるところが大きく、望ましい楽器活動のあり方を考えて実践しなければならない。

第2節 小学校学習指導要領「音楽」

1. 概要

幼小の関連として小学校の教科「音楽」を見る。小学校学習指導要領は平成20年3月に改訂が行われ、新小学校学習指導要領等は平成23年度から全面的に実施することとしているが、現在平成21年度は移行措置として、一部を先行して実施している。この改訂の要点として、これまでは表現及び鑑賞の2領域で講成されていたが、共通に必要な共通事項が設けられたこと。また、表現の領域は「歌唱」、「器楽」、「音楽づくり」の3分野ごとに示すこととしたがある。したがって具体的には、「歌唱」、「器楽」、「音づくり」、「鑑賞」の4つの活動からなっている。ここでは密接に関係のある第1学年及び第2学年の「器楽」と「音づくり」を見る。

2. 「器楽」

器楽の表現を通して、基礎的な表現の能力を育て

ることであり、内容のA表現(2)に、器楽の活動を通して指導する事項とし、ア 範奏を聴いたり、リズム譜を見たりなどして演奏すること、イ 楽曲の気分を感じ取り、思いをもって演奏すること、ウ 身近な楽器に親しみ、音色に気を付けて簡単なリズムや旋律を演奏すること、エ 互いの楽器の音や伴奏を聴いて、音を合わせて演奏することがある。

そしてその解説に使用楽器の選択として、低学年では身近な楽器、打楽器、オルガン、ハーモニカなどの楽器とあり、さらに指導計画の作成と内容の取り扱いにおいて、前述の中から学校や児童の実態を考慮して選択されるとある。また内容の取り扱いと指導上の配慮事項の説明には、各種オルガンや鍵盤ハーモニカも記されている。

次に中学年になると、既習楽器を含めて旋律楽器としてはリコーダー、鍵盤楽器、打楽器として木琴、鉄琴、和楽器、諸外国に伝わる様々な楽器となり、高学年では、既習楽器を含めて電子楽器、和楽器、諸外国に伝わる楽器などからで、打楽器は中学年と同じとなって展開されていく。

3. 「音づくり」

音づくりとは、児童が自らの感性や創造性を発揮しながら自分にとって価値のある音や音楽をつくることであると記されている。

そして音づくりの活動を通して指導する事項とし、内容のA表現(3)に、ア 声や身の回りの音の面白さに気付いて音遊びをすること、イ 音や音楽にしていくことを楽しみながら、音楽の仕組みを生かし、思いをもって簡単な音楽をつくることとある。

特に低学年においては、音の様々な特徴に気付く能力、音を音楽に講成する能力を育てていくことが指導のねらいとしてあげられ、音遊びや簡単な音づくりを十分に楽しむようにすることとある。様々な音としては楽器だけでなく、声、自然や生活の中での身の回りの音などにも気付き、音への関心を高めていくものである。そして、楽しい音楽づくりの活動となるように進めることが望まれている。

これらの表現教材として器楽教材選択の観点があり、主な旋律に加えるリズム伴奏が児童の実態に応じた平易なものであり、楽曲の気分が感じ取りやすいものを主に取り上げるようにする。また、合奏全体の響きを支えるための低声部は主音及び属音を中心とし、児童の実態に応じて他の音を加えた楽曲を取

り上げることが望ましいとある。

したがって、楽器を用いた活動は小学校になると「器楽」、「音づくり」として発展していくわけである。中でも関わりの深い低学年の「音づくり」の活動では、音の様々な特徴に気付く能力、音を音楽に構成する能力を育てていくことが指導のねらいとしてあり、音遊びや簡単な音楽づくりを十分に楽しむようにすることであるため、幼小の関連としてうまく受け渡しができるように、指導内容についての相互理解が必要である。

第3章 保育における楽器を用いた音楽活動

第1節 保育現場で

では、実際に保育現場で楽器を用いた活動はどのように実践されているのだろうか。保育の中での音楽カリキュラムにつき、筆者が行った質問紙によるアンケート調査結果をもとにその実態を述べる。調査は2002年9月、実習および就職など本学と関係のある京阪神の私立幼稚園92園（発送192園、回収率48%）、保育者による記入である。

1. 楽器を用いた音楽活動の取り入れ方と時間

音楽カリキュラムの中に楽器を用いた活動を取り入れているか、およびその取り入れ方についてであるが、「楽器を用いた活動」は音楽カリキュラムの中での他の音楽活動「身体活動を伴うリズム表現活動」と関連していた。

アンケート結果より、「身体活動を伴うリズム活動を行っている」95%、「行っていない」5%であったが、「楽器を用いた活動を積極的に取り入れている」のは「身体活動を伴うリズム表現活動をあまり行っていない」方であった。「楽器を用いた活動の取り入れ方」（無記入40%）につき、「特に決めていない」は全く見られず、週に1回、週に2回行う、行事に向けて行うのいずれかに該当し、この3つのパーセンテージは平均して同じであった。

「楽器活動の時間」（無記入20%）は、「10～20分」20%、「20分」40%、「30分」20%で、20分が最も多い結果となった。

したがって、週に1～2回、あるいは行事に向けて10～30分を楽器の活動に充てていることが示された。

反対に「身体活動を伴うリズム表現活動は行っているが、楽器を用いた活動を積極的に行っていない

」方は、「楽器を用いた活動の取り入れ方」につき、特に決めていなかったり、回数や時間が少ない傾向にあり、次の通りである。

「楽器を用いた活動の取り入れ方」（無記入20%）につき、「特に決めていない」20%、「週に1回」18%、「行事に向けて」13%、「月に1～2回」8%、「週に2回」7%である。

「楽器活動の時間」（無記入24%）は、「20分」17%、「20～30分」14%、「15分」13%、「30分」8%、「15～30分」6%、「10分」6%となり、20分前後が多いことが解った。

これらをまとめると、楽器を用いた活動は週1～2回、20分前後行われている結果となった。

2. 使用楽器の選択

次に子どもに与える楽器の種類（複数回答）であるが、上位より「タンブリン」65%、「カスタネット」58%、「鍵盤ハーモニカ」56%、「スズ」44%、「木琴」38%、「トライアングル」35%、「シンバル」27%、「和太鼓」20%、「小太鼓」13%、「大太鼓」11%。その他非常に少数であるが、「ハンドベル」、「シュタイナーの木琴とライヤー」、「モンテッソーリの音感ベル」もあげられていた。

上位は予想していたリズム楽器であるが、鍵盤ハーモニカの使用が多いことは今回の大きな特徴である。また手作り楽器の使用もあるのではと予想したが、見られなかった。

3. 行事との関連

楽器を用いた活動内容と行事との関連を見ると、「発表会（クリスマス会、生活発表会、音楽会などを含む）」を行う園は6割あった。

その内容は、「歌」60%、「合奏」40%、「鼓笛隊」20%、「和太鼓」20%、「鍵盤ハーモニカ」20%、「踊り」20%であった。「歌」と「踊り」以外は楽器を用いた内容である。

4. 曲の選択

最後に「楽器活動で使用している曲名（複数回答）」を示す。「おもちゃのチャチャチャ」30%、「となりのトトロ」22%、「ハイジ」20%、「チュンチュンワールド」20%、「ルパン三世」20%、「マンボ No. 5」20%、「今風なリズムのもの（曲名ではない）」20%、「キラキラ星」12%、「ドレミの歌」7%、「カエルのうた」7%などであった。幼児が慣れ親しんでいる歌の曲を楽器活動に使用していること、リズムミカルな曲であることが大きな特色である。

第2節 教育実習を通して

次に、筆者が保育者養成大学の3年生（2004年度122名、2005年度132名、合計254名）を対象に2年間に渡り行った質問紙によるアンケート調査結果より、幼稚園実習（京阪神を中心にした公立幼稚園28%・私立幼稚園72%）で行った音楽指導および活動、中でも「楽器を用いた活動」について見る。

調査期日は11月に実施される3週間の実習後、11月末。回収率100%。結果は、2年間の平均値とする。

1. 実習でさせていただいた音楽指導

3週間の期間中に実習させていただいた音楽活動（複数回答）は、「歌唱」70%、「身体運動を伴うリズムの表現活動」45%、「手遊び」27%、「弾く（楽器）」10%、「無し」10%であった。園生活の中で幼児が歌う機会はとても多く、歌唱指導を最も多くさせていただいており、「楽器を用いた活動」弾くことは1割と少ない結果であった。楽器の活動は行事との関連で音楽カリキュラムを組まれている場合が多く、実習に行く時期によっても現場での取り入れ方は異なっている。

「楽器を用いた活動の内容」は、「打楽器リズム楽器をたたいたり振ったりして音を出すこと」、および「リズムを打つこと」であった。

2. 音楽指導で困ったこと

「音楽指導で困ったこと」（複数回答）と尋ねると、実習させていただいた内容と同様に「歌唱」、「身体運動を伴うリズムの表現活動」、「弾く（楽器）」であった。

そして「楽器を用いた活動で具体的に困ったこと」を尋ねると、「子どもが集中していなかった」、「子どもが楽器に必死になり過ぎる」、「子どもが楽器にこだわりを持ち楽器によって嫌がる」、「する子どもとしない子どもがいる」、「3拍子を教えたが難しかった」、「速さが難しい」、「歌と一緒に教えることが難しい」という答えが返って来た。学生にとって今回が初めての实習のため、このような子どもの反応に戸惑いを覚えたのかもしれない。さらに楽器ならではの指導上の難しさが有り、子どもと楽器の関係を垣間見ることができる。反対に少数であるが、「思いどおりにできた」と感じた学生もいた。

3. 楽器を用いた活動で、思い通りに出来た具体的な内容

1. の結果通り、楽器を用いた音楽指導が少ない

ため、それぞれの回答となった。「子どもが楽器を使って楽しむ」、「子どもが楽器に興味を持った」、「楽器の使い方」、「集中させることができた」、「ピアノの旋律に合っていた」など、楽器に触れる経験があったからできたと言えよう。

実習課題として園から与えられる場合と、自分で考えて何か音楽活動を入れて下さいなどそれぞれのケースがあり、今回は初めての実習で学生自身も不安であったと思われる。音楽指導全体を通して学生が感じた最も多くは、「ピアノの練習が必要であった」である。それから「子どもは歌が好きだと感じた」、「もっと声かけが必要であった」と続き、今回の経験を活かして次につなげてほしいと思う。

第4章 考察

第1節 楽器を用いた音楽活動の価値

いくつかの視点から楽器を用いた活動について概観したが、前述の通り保育の中で、他の音楽活動に比べて活発な音楽活動とは言えないようであった。それは幼稚園により音楽カリキュラム構成が違うことが大きく影響しており、楽器、その他、音楽活動の取り入れ方が異なってくるからである。少ないデータではあったが、中でも身体活動を伴うリズム表現活動を行っている方は楽器の活動が少なく、楽器の活動をよく行っている方は身体活動を伴うリズム表現活動を行っていないという結果には驚きであった。また、楽器を用いた活動の取り入れ方を特に決めていない園が2割あったことも特徴であり、楽器を用いた活動を含め、1年間の計画的な音楽カリキュラムを立てる必要性を感じる。幼児の表現活動、音楽教育に対する考え、園の特色や教育方針を活かしてのことだと思われるが、子どもの音楽性を伸ばすために偏ることがない、総合的な音楽カリキュラムとして見直し、保育の中での音楽カリキュラムと位置付けを明確にすることが必要である。また、楽器を用いた活動を行っていても回数や時間はそれほど多くなく、内容も園によって様々であったが、園行事と行事の内容に関連していることが示された。保育カリキュラムと音楽の両面における園での考え方が、音楽活動の内容につながったと思われる。

使用楽器の中に「鍵盤ハーモニカ」が6割弱あったが、幼稚園教育要領に使用楽器名は特にあげられておらず、簡単なリズム楽器とある。また小学校学

習指導要領の低学年には、身近な楽器、打楽器、オルガンハーモニカなどの楽器とあり、内容の取り扱いと指導上の配慮事項の説明に、各種オルガンや鍵盤ハーモニカとある。したがって、幼稚園で少し早く鍵盤ハーモニカを導入していることになるが、用い方によるであろう。吹きながら弾く、すなわち2つのことを同時に行うので、幼児にとって無理がないかどうかである。幼児の場合、1つのことを行うだけで精一杯のため、奏法は容易で負担にならないように留意する必要がある、またその楽器を使用する音やリズムも単純でなければならない。

実習に行った学生の報告からも、3週間の実習期間中に楽器を用いた活動にあまり接していなかったようであるが、行く時期により保育内容や行事も異なるので、また違った結果になったかもしれない。

今回は保育者に楽器を用いた活動につき、具体的な内容を詳しく問うことができなかったが、楽器ならではの指導の難しさがあることに気付かされる。回答にもあったように園の行事との関連で、クリスマス会、生活発表会、音楽会での歌や合奏で、楽器を弾き演奏するわけであるが、音楽的な内容から見ると、大勢で行う合奏は自己中心的な幼児にとって非常に困難なことである。ひとりで自由に弾くことと異なり、みんなと一緒に合わせなければならないので、リズムや音を一定の速度で演奏する難しさがある。行事での音楽内容は日々の保育の積み重ねであるので、音楽内容が特別なものにならない配慮が必要である。それから行事は子ども達だけでなく保護者、その他、多くの人が参観に来るわけであるが、子どもはいつもと異なる環境で演奏することに戸惑い、その場に立つだけでも緊張してしまう。そのような中で大人は演奏技術に注目し、技術の高さで善し悪しを評価する傾向にあるので、この点についても考えなければならない。マーセルによると、技術は築きあげて得られるものではなく、発達の結果であると言う。器楽学習と音楽技術の問題はついてまわるものであるが、音楽の勉強の最大の成果は技術の発達ではない。また、技術を高めるための練習が音楽学習ではない。彼が言うように、技術を学んでいるとき成長の過程が進行しているのであるから、子どもの興味的価値を大切に表現する機会を与え、まず音楽を表現することである。子どもと楽器の関係がよくなり、楽しい活動にすべきである。

本学の音楽教育と関連のある2つの書籍からは、

現在の保育の音楽活動につながっていることを強く感じた。音に対する興味から楽器活動を楽しむ経験を通し、リズム的反応や音楽的能力を養うと同時に、多くのことを学習する楽器活動に価値を認めている。また内容や楽器の選択についても、具体的に示されていることが確認できた。中でも「幼児の音楽」では、音を実験して試みることから始まりいじり遊び（manipulation）の大切さが示されたが、幼児の導入段階の指導において特に必要なことである。いじり遊びから音を自由に試みる中で音色、音高、振動、強弱などを感じ取ることができ、興味を増す。その興味から幼児の要求を満たすような楽器活動を導き展開していかなければならない。このいじり遊びに楽器使用の価値を置いたことは、幼児の音楽指導に重要なことであった。それと共にいじり遊びができるように楽器を置き、自由に楽器を使える機会を与えることも明記されていたが、これは現在においても必要なことではないだろうか。楽器の持ち方の指導など形から入って音を出したり、楽器に慣れ親しむことに時間をかけないで音を出したり合奏することは幼児にとって無理があるので、導入に時間をかけ、楽器活動の内容とその指導方法について見直すことが必要であろう。それから音を間違えたりしても本来の目的である楽器を演奏すること、美しい音や音楽を求めて演奏することを楽しむことができるような指導も必要で、ただ楽しむだけに終わってはならない。

楽器を用いて音楽を表現し楽しむことと技術面の両方のことをよく考えた指導から、創造的な音楽活動となり、幼児の音楽的な成長を期待することができる。

第2節 音楽的環境

物的環境として、保育現場の楽器について考えたい。前述した2つの書籍にも楽器が示され、筆者の調査からも前述したような楽器が保育現場で使用されていたが、幼児にとって適切かどうか、楽器を見直すことも必要ではないだろうか。楽器は楽器活動の内容にも関連しているので、音を試みるための材料も含め、幼児にとって適切な物的環境として準備されなくてはならない。また既製の楽器を使用するだけでなく奨励されている手作り楽器の製作は、音が出るものを作ること、自分の楽器を持ち演奏することなど、幼児にとって教育的に意味のあるもの

になる。

子どもの創造性を育てる音楽教育方法を提唱したカール・オルフ（1985～1982）は、身体を楽器と見なし、手や足、ひざ、指など自分の身体を使ってリズムを打つことから始めた。ドイツの民族舞踊に見られるような手拍子、足拍子、ひざ打ち、指はじきなどである。そして子どものためにどのような楽器がよいか、楽器製作者メンドラーと共にオルフ楽器を考案した。オルフによると子どものための楽器には3つの条件があり、第1に美しい音色の楽器、第2に奏法が容易な楽器、第3に丈夫な楽器である。特に2つめと3つめに関しては子どもの特質をよく知り、子どもが使用するためにと考えられた条件であろう。音が美しいことはもちろんであるが、演奏方法が難しいと子どもは楽器を楽しむことができない。また力をじょうずにコントロールすることができないので、ある程度丈夫でなければならないとした。

楽器の種類は共鳴箱をつけた音板楽器（木琴、鉄琴）、小打楽器類、低音楽器、鍵盤楽器（シュピネット、クラヴィコード、チェンバロ）、旋律楽器（ブロックフレーテ、フィーデル）などである。この音板楽器は共鳴箱で美しく響くと共に、必要な音板を取り出して演奏できることが特徴である。さらに使用するばちはこれまで頭が固いものが多かったが、柔らかい材質にして音色に変化を持たせるよう工夫された。そして子どもは大人の縮小版ではないとの彼の考えのもと、楽器の大きさも子どもの体格に見合ったものとし、トライアングルやシンバルなど、これまでになかった小さいサイズの楽器も使用された。また、楽器は各民族の音楽文化からも選ばなければならないという考えも根底にあり、子どものためにという視点から楽器についての研究と実践がなされた。

音楽内容についても『子どものための音楽』にあるように、子どもが無理なく楽しむことができるものとした。音楽の創作、再現、聴取などは細かく分離するものではなく、一体となって行われるものであるという考え方である。具体的には即興表現の原点としてのことばや歌を大切に、遊びやわらべうたから素材を取り出し、ことば、リズム、エコー、オスティナート、創作、アンサンブル、即興演奏などの中に、自然な形で楽器が取り入れられた。特に楽器でオスティナート手法を行うことは、同型反復

のため、幼児には無理なくできることである。ここでの音、旋律は、幼児に適したと考えられたペンタトニックであった。

音楽活動の中で使用する楽器について考えるに際し、まず使う幼児のを中心にして考えることが前提である。見せるための楽器でなく、幼児が使う楽器としてどうであるかを考えながら与えてほしい。保育室での楽器の置き方、幼児への楽器の提供の仕方などをよく考えること、今ある楽器を見直すことが必要であろう。

終わりに

子どもと楽器の関係はさまざまで、保育の中でも楽器を用いた音楽活動の取り入れ方や内容には差が見られ、保育カリキュラムや音楽カリキュラムを見直し、音楽活動が偏らないカリキュラムが必要であることを強く感じた。園での行事やそこでの内容の違いが大きく楽器活動に関連していたことが明確になったので、幼児に焦点をあて、幼児に必要な音、楽器活動とは何かを考え実践していくことが必要であろう。マーセルは子どもが最初に示す音楽的反応は音そのものに対してであると言うが、そこに原点があるのではないだろうか。manipulation ができるよう導入には十分に時間をかけ、音を探求できるような場を提供することが必要であることも示唆された。そして大人も子ども以上に音に敏感になり、音に気付くことが必要かもしれない。また周知のことであるが、指導する側が感受性豊かになることはここでも言えることであった。楽器を用いた活動を通して、美しい音、おもしろい音、さまざまな楽器に出会い、触れることや弾くことから音楽を創ることを楽しんでほしいと願う。内容については継続して今後の課題としたいが、楽器の活動を意義深いものとしていきたいと考える。

参考文献

- 1) G. Thorn, Alice 1929 *Music For Young Children*. U. S. A : Charles Scribner's Sons
- 2) G. Thorn, A 著、高森富士子、伴きみ子共訳 1935 幼児の音楽 教文館
Hill, P. S. & Teachers of Kindergarten And First Grade Horace Mann School 1923 *A Conduct Curriculum for the Kindergarten and First Grade*. New York: Charles Scribner's Sons.
- 3) Hill, P. S. 他著 高森富士子 訳 ランバス女学院編纂 1936 幼稚園及び低学年の行為課程 教文館

- 4) 文部科学省 2008 幼稚園教育要領 教育出版株式会社
- 5) 文部科学省 2008 小学校学習指導要領解説音楽編 教育出版株式会社
- 6) 文部省 1994 教育用音楽用語 日本教育新聞社
- 7) Mursel, J. L, Glenn. M 著 供田武嘉津訳 (1965) 音楽之友社
- 8) 中村千晶 2003 養成校における音楽教育の現状について—養成校と保育現場のアンケート資料を通して— 聖和大学論集第31号 93-103
- 9) 中村千晶 2006 養成校における音楽教育に関する一考察—実習をとおして— 聖和大学論集第34号 95-103
- 10) 西岡信雄 2000 楽器からのメッセージ 音楽之友社
- 11) 西岡信雄 2002 イオンじいさんの笛 音楽之友社
- 12) 西岡信雄編著 2009 よくわかる楽器のしくみ ナツメ社
- 13) Sachs, Curt 著、柿木吾郎訳 1965 楽器の歴史〈上・下〉全音楽譜出版社
- 14) M. ドロシー、M. ジェーン共著 神原雅之他訳 1999 音楽的成長と発達 溪水社
- 15) W. ケラー、F. ロイシュ著 橋本清司訳 1971 オルフ子どものための音楽解説 音楽之友社